

須彌山圖解全

= 5

2523





須弥山名ハ三尺ハ童子も
 知レトモ此祝甚佳ト
 志者ノ帝素伍ノヲ然
 林ノ徒トクモ行生ヲ探
 先生ノ此ヲ推テ実ヲ勤
 只切希ク便有ルヲナ
 有モ此ヲ浅クナシ人
 梓ノ老人ノ此ヲ先君
 幸ニ是ヲ序セリト

5
 2523
 卷

余固より 菲才 涉後 矧也 學の
 知ざる 不なり 何如 吟の 志を 存せ 念生
 尋事 其 懇請 題止 志を 存せ 念生
 多の 後所 叙て いたす 卷首 冠し
 心をも 志あり 時文化 六年秋

東屏 富家 恭識



序 秋夜 蒲床 了 黙 音 此 志 窓 小 燈 を
 披く 古 紙 関 几 上 極 々 眠 らん 時 々
 士 情 未 遑 筆 一 小 冊 を 懐 け 來 て 余 此 序
 記 せる 書 する 也 亦 未 遑 筆 一 小 冊 此
 志 所謂 須 弥 山 也
 園 解 述 者 八 高 蘭 山 先 生 ナ 也 云 々



先生姓ハ高井名伴寛字息明蘭
 山ハ其号也幼冠より書を讀む好
 博ク内外二典ヲ涉リ天文曆數
 律ノ精ク傍西洋諸蕃ヲ學ビ暨
 暇日童蒙ニ教ヘて是ヲ述器界安
 立ヲ示シ日行月移ヲ示シ及
 儀ヲ述リ其誤ヲ正シ且佛道
 妙ヲ示シ及
 あらとと友明しく其任蒙昧
 後セリ

須彌山圖解

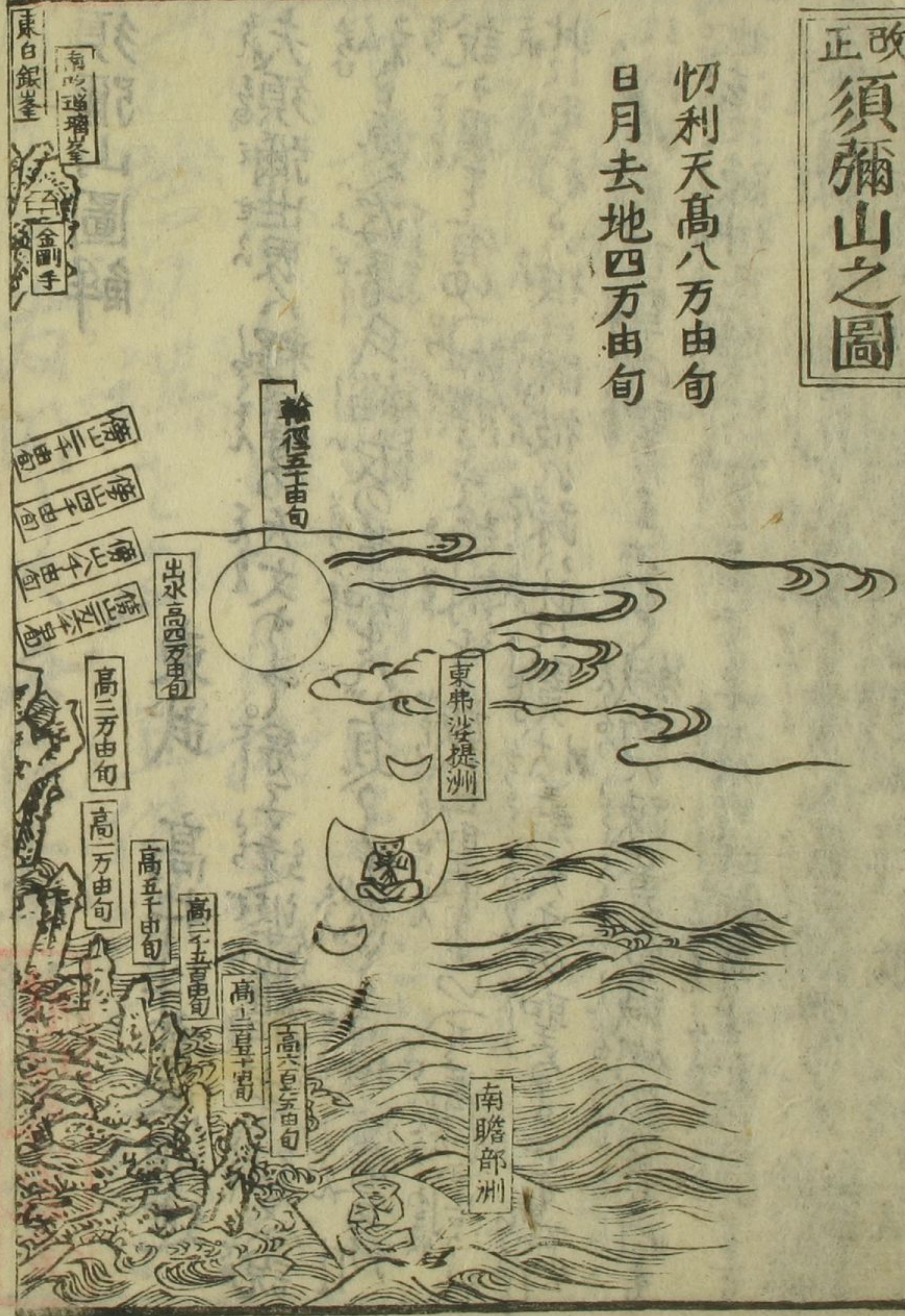
高井伴寛書

東武 高井伴寛思明述

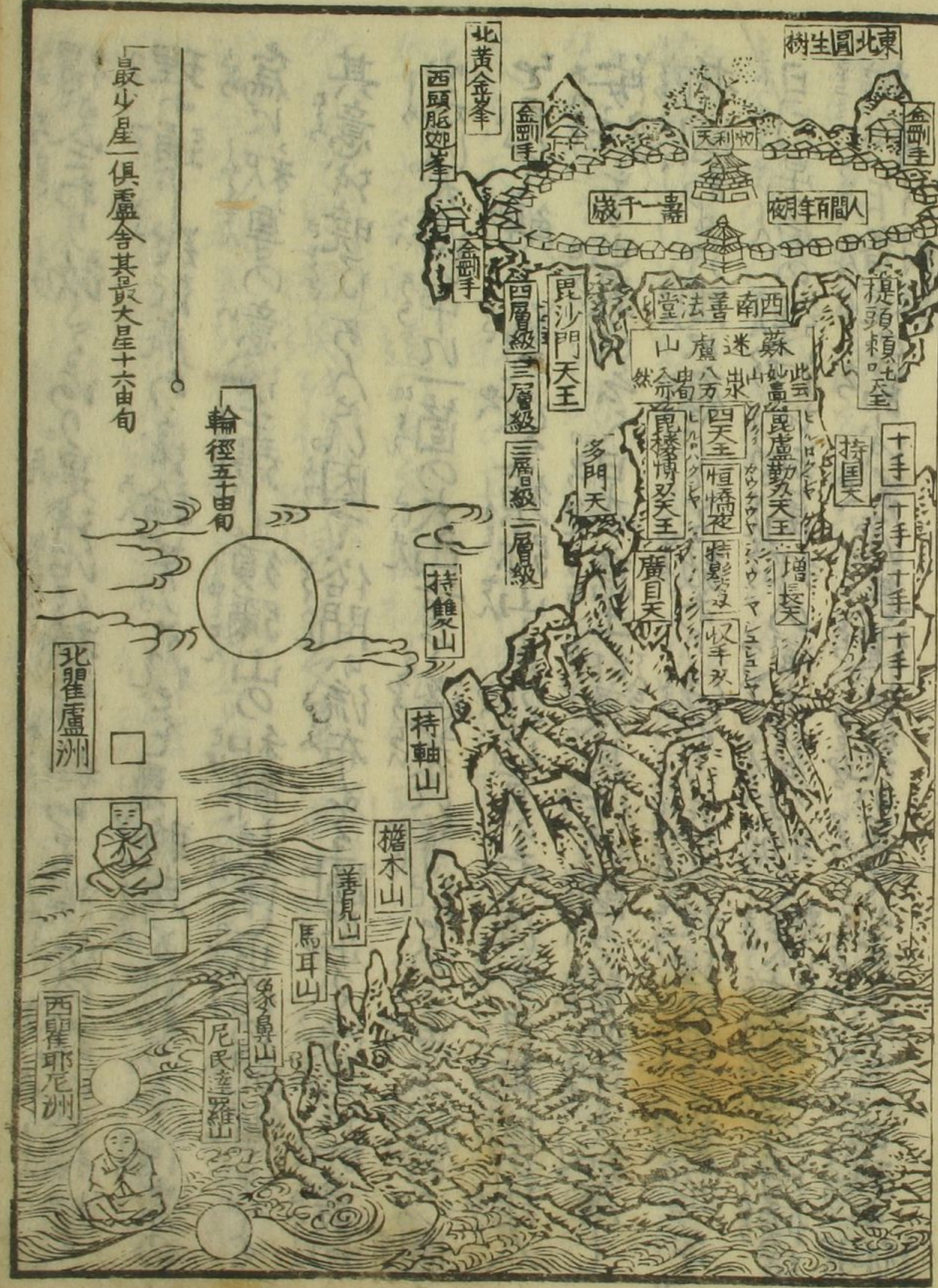
夫須彌世界ハ釋尊の天文ヲ以テ房子達波羅門等往ノ説
 云々處ニ浮屠氏緇衣の輩知ルハ有ベクも然レども日域震旦の所
 説ハ異テ有レド士撰テ并テ族ハ曰聖賢といハ萬法ハ周
 此に聖なるハ彼に疎彼に疎此に賢伏羲天文の聖なるも百
 に疎神農百草の聖なるも織術に疎黃帝織術の聖なるも
 世法に疎仲尼世法の聖なるも生歟に疎釈尊生死の聖なるも
 天文に疎又梅定九曆算全書にも蓋天周髀の學子蓋天周髀
 小出も其書全ク傳ハレ宣夜學所天論宵天論
 かと皆支那の古天文曆數の乃を説筆なり
 西土の國々に流傳。是故

改須彌山之圖

忉利天高八万由旬
日月去地四万由旬



東北園生樹



最少星一俱盧舍其最大星十六由旬

得ふ全あり欽するなり。是は治に精あり粗あり。須弥の説此に根けり。
理の通下れたる處あり。議論せり。されども愚聊考るにわたり。今僧家の
爲に釈尊の意法主張し。須彌山の和解は筆(世俗の兒輩までも
其意は曉りしんといひ。因て俗間の流布せる圖に少く改正は加最初
小示は大海の中の一箇の大山有る蓬萊に等しきものと思ふ族わりの圖
を見て解し難に故に須弥山と外に有るわ成。今日萬國の諸人
皆往する世界は云く日本唐土印度其作の國々皆此中と知し。
抑國ありは國に應じたる教あり法あり。天文地理の学も教のツボて。
日月星辰の運行は知萬邦の風土は考物々禁枯頭晦の時候は
辨耕作播種の節は差は。其道は究み至て天人合一の理は洞

印

達し。こゝに世儒佛家説本邦夫々の天文あり。先儒家の天文
とハ支那の諸首は義仰て天文を觀俯て地の理は察せんとせり。
黃帝岐伯以下聖賢の發明より出漢の劉洪宋の何承天元の郭守敬の
名家追々精微は竭し。清に弘曆の帝あり。今其道行佛氏の天
文とハ天竺より釈迦の立ちし。須彌山之其説俱全論世間品に
悉す。本邦神道の天文ハ國初より傳へ聖德太子安倍清明等
の博識愈々緼奥は得殊域の天文も兼用するの博く他の美
は空にして我美は増人我各別の見るに日本の風義之故に貞亨曆
以前ハ唐土の曆法は用らる。又ハ須弥山の圖は製表造日月は懸て
運旋の理は明る儲にせられ。今古紀に出るも今渾天儀は扱ふ

似たるもの。須弥の絶頂極樂界と云ふ故其後佛家の莊嚴も其餘の外

國夫との天文學子わきた。都て天ハ軍圓也。雞子白の如く外を覆

地も亦圓らんと。鷄卵黃の如く適中にわり。天ハ旋て想ひ地ハ靜て動

をと説く大槩亦下也。罕に地動の説わきども實理の背取用也。

叔儒家の天學ふ云ぬ。天の形象ハ一箇の西瓜也。瓜の壁厚ハ花墮の

處に南極わき。蔓切斷る。蒂の如く北極わり。二箇に割んと。庖丁

切下さんときる。如赤道是より南北二極の如く九十度余づ其内

双方二十二度半づの間ハ毎日日輪道異なり。運旋及至

南の端ハ旋復至北の端。來春分と秋分ハ赤道の下。行都て

目道ハ黃道と名く。日行毎日道異なり。晝夜長短わり。寒

暑ハ暖の氣候粵に起る。日本唐古天竺ハ北極也。南

極地下に沈で見ざる國也。小く斜之氣專此也。北極也。如

世界の巔也。日月山の腰ハ運行心の周回背面に依り。晝夜長

と説乾坤の間ハ惣括て須弥也。彌。其絶頂也。切利天と稱す

の峯也。如。峯毎に八天半。四八三十二の中央ハ帝釈天坐也。如

合て三十三天と稱す。天上世界是之天上也。極樂界地獄地獄と立

て教る爲に。廣大の佛智也。以て斯將説也。如。凡愚の既也。如

の如。南北二極ハ確磨の眼の如く。其處ハ在て。旋ハ相對して天の

樞とらるるもの。地ハ形象毬子の如く。其田ハ如て萬國列並也。北極

三十六度高くも。南極ハ三十二度地下に隱る。若北極也。如

見て九十度なり。則頭上にあり。南極は足下の天あり。北極國
女日月横に旋地上なる間半年長に昼之地下に沈むる間は
又半年長に夜之日の運旋遠く。極を以て地の夜は氷海と云海の鹹
水まで氷の厚ると是儒家の天学の説也。今須弥山北極頭上や
耶。日月が横に運ぶその是に相似り。唯地球の説もして佛説粗
るるが如し。梅勿菴氷と云行ス
俱舍論須弥諸の有情の業増上力及び最下に於て虚空に依止
して風輪はさるるあり。廣く无數厚と十六踰那耶。由旬と云高
出又諸の有情の業増上力及び大雲雨等記。風輪の上の樹を
滯車軸の如し。積る水輪と云る未凝結さる深と十一億二万踰那

耶。又諸の有情業力の感もる。別風起て水が搏撃。結で令と
る。水輪減と唯厚と一浩又。各落砂や崖は。轉と令輪と云る
厚と二億二萬とあり。是水風令の二輪が説明もろのめて。水輪
と六世界の海風輪の地上と天との間令轉地也。今佛説又八合輪を説
たり。神道儒家の書も。田圃造化の玄妙。大極陰陽五行の理。人
事に託し演説と有に皆。震旦の五行が況。印度の四大と云る。
佛説須弥山は海四大洲と云令輪の土に九つの大山あり。妙
高山王六中に處し。妙と云蘇迷盧山。佛の八の周布して妙山
が繞其中七つの山内也。其外に大洲四等あり。又其外に鉄輪圍山
あり。圍布て輪の如く。一世界は包空次。禪宗の四相。妙なる水入と

八萬出ても亦同。海の八六半々に下り。其の四万のまは廣を四
 万。其次ハ又半に下り二万。如斯其九山の間に海あり。廣狹内
 外半に減る。とたの圖の如し



九山の高下七
 海の廣狹分量
 如斯也。其圖に
 其實形は摸
 擬。殊に世俗
 是公説に翻
 するものなり。

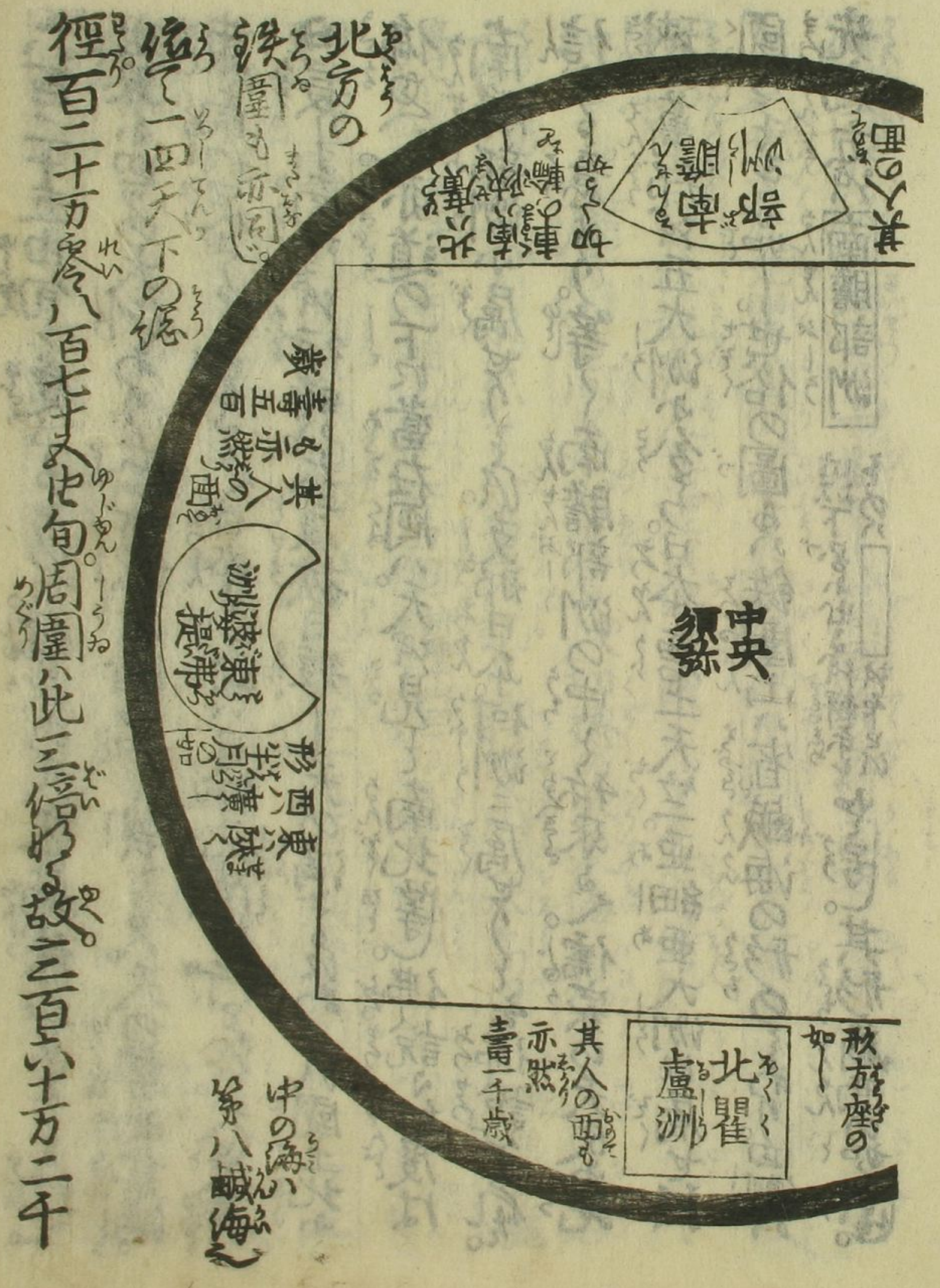
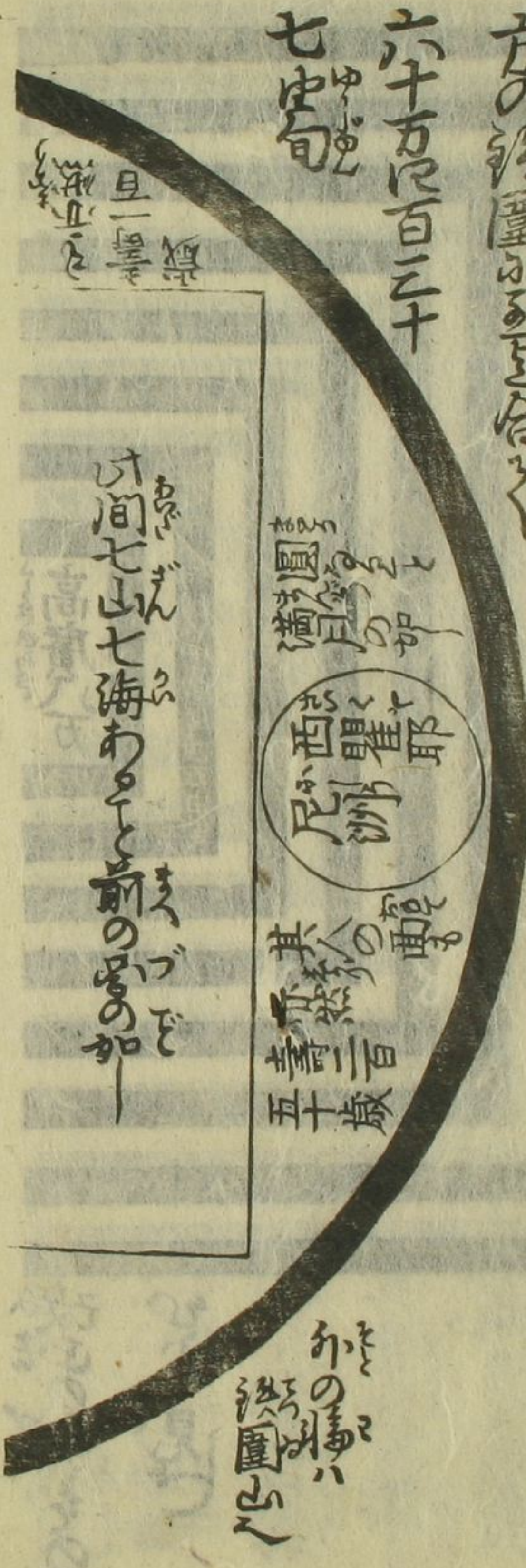
五



改正の是を
 みて見せ

須彌妙高山中央に居。八万由旬。其中心より量取。取六万。之次ハ
 持雙山高廣とのに四万。持軸山二万。擔水山一万。善見山五千。馬耳
 山二千五百。象鼻山一千二百五十。尼浪達羅山六百二十五由旬。右乃

七山以内は金の所成の七金山云々 金場きんばの地ちより外そとの鉄圍てつゐ圍山ゐさん示
 半以下はんぎやう。二百十平由旬ひゃくじゅうへいゆじゆんより一圓いちゑんの海うみ第六度だいごくだう八五度はつごど二六度にじゅうろくだう第
 三二万さんじふばん第四一だいしち万ばん第五六五だいごはつご千せん第六二二だいごにじふに千せん第五百だいごひゃく第七六二だいごしちじゅうろくに千せん二百五だいごにじゅうご十じゅう之
 數かずハ切徳きりとくの香水かうすい海うみ湛たん故香水海かうすいうみ云々云々第八だいはちの海うみ外そとに鹹水かんすい盈えい
 滿まんと説せつり。六鹹海くっかんかいハ三二五さんじゅうご千由旬せんゆじゆん以上いじやう須弥すみの中心ちゆうしんより南みなみ
 方の鉄圍てつゐハ三二五さんじゅうご千由旬せんゆじゆん以上いじやう須弥すみの中心ちゆうしんより南みなみ



徑百二十方八十七由旬 周圍ハ此二倍この二倍故二百一十方二千

六百二十五由旬と定くるもの。儒家の天文に地球九万里と云く。世界四ツの大洲あり。土地の敷象圖の如く異なる。天の勢西北滿東南に足ざるを見らる。日本を云。日輪北陸を行く。天度廣日長。南陸を行時。天度挾日短。天の満ざるは。國土北偏也。赤道の下に當在。天は見と南北等。佛説印度は南瞻部洲小属せりと。支那日本河洲ニ属せりと。佛説を信ざる意より。等々南瞻部洲の中と称來る。儒家の天文地球の萬邦は五大洲あり。日本唐土天竺亞細亞大洲に属せり。國々とする如く。世俗の圖は鉄圍山六省鹹海の形のあり。四洲の先南方は南瞻部洲

以下下なるは解を云。其形扇面の如く。其のハ

傍に同じ形は細小の号を。一属國幾許箇有る風土同に示す。その北方に北瞿盧洲。西方に西瞿耶尼洲。東方に東弗提洲を。方者半月。天の勢は其理地。一各候。属洲に。知座。七層の山の間に水は畫る。一切徳の香水海。九方の山。右方に夫々の高さ水は出る分量を記す。持雙山出水高四万由旬。須弥の絶高は一万。其半は持軸山高二万由旬。持雙山四方の權木山高一万由旬。以下。善見山高五千由旬。馬耳山高二千五百由旬。象鼻山高千二百五十由旬。尼浪達羅山高六百二十五由旬。其間の七海廣。前の方番に記如。諸海より四万由旬の持雙山。須弥の半覆。是より一万由旬。一層級。二万。二層級。三万。三層級。四万。四層級。初利天

なり。諸神あまのじんは手てに以もつて敬やぶら持もちの意い以もつて。一層いっしやう毎まいに十手じゅうてと名な。須弥しゆぢ山の四層しやうじやう目めより下したへ三層さんじやう目め迄いたるの間まはらに四天王しやうてん坐まて守まもる。提頭だいとう賴らい叱しつ天王てんわう毘盧びる勒りやく又また天王てんわう毘樓博びるはく又また天王てんわう毘沙門びさもん天王てんわう是こゝに宮居みやゐの形かたち四箇圖しよかんずを以もつて其その宮殿みやてんを。右四天王みぎしやうてん六梵むつぼん名なを以もつて翻譯たぎやくと名なす。下の名なと名なす。持國天ぢこくてん東方とうほうにあり。增長天ぞうぢやうてん南方なんぽうにあり。廣目天くわうもくてん西方さいほうにあり。多門天たもんてん北方ほくほうにあり。又また其その數かずは倍ばい。傍山やまのかみ四千由旬よんせんの間まはらに恒憍夜かうけうやの神かみ。又また其その數かずは倍ばい。傍山やまのかみ八千由旬はちせんの間まはらに持髻ぢしやく及また神かみ。又また其その數かずは倍ばい。傍山やまのかみ二万六千由旬にまんろくせんの間まはらに堅手けんて及また神かみ守護しゆごあり。凡おほむね二千由旬にせんより。二万六千由旬にまんろくせんの處ところまで。合あはして三方由旬さんぽうせん四天王しやうてんの持もち一いつ万まんを加くわへ四方由旬しよぽうせんの持もち雙じやう山さんより。切利天せつりてんの間まはらに彌提盧山ぢていろうさん六梵むつぼん語ごを以もつて。三字さんじは妙高みやくかうと翻譯たぎやくと。

此云妙高山このうたがはとあり。此方このあたの言ことはと云いふ。出水しゆすい八万由旬はちまん入いり亦また然しかと云いふ。須弥しゆぢの處ところは八万由旬はちまん入いり亦また然しかと云いふ。海水かいすいより上かみへ入いり八万由旬はちまんと云いふ。亦また然しかと云いふ。須弥しゆぢの處ところは八万由旬はちまん入いり亦また然しかと云いふ。地球ちきう正形せいぎやうの半なかは北平規ほくへいぎの上かみに在あり。下したへ四よの廻まわり。須弥しゆぢの處ところは八万由旬はちまん入いり亦また然しかと云いふ。正ただ中なかに宮殿みやてん大おほきと名なす。是こゝに帝釈天ていせつてんの居ゐる處ところに。儒家じゆぎやの天文てんぶんの北辰ほくへんより。周圍まわり。小こに宮みやの列つら並ならは四方しよぽう八天はつてんづ。三十二天さんじにてんの居ゐる處ところに。儒家じゆぎやの天文てんぶんの北辰ほくへんより。東南とうざん西北せいぱく四よの峯かみ。是こゝに天上てんじやうの山やまの峯かみあり。高たかに以もつて。復またて峯かみと名なす。南吹瑠璃なんすいりゆり峯かみ北黃金ほくごうごん峯かみ西頗脂せいぜん迦か峯かみ東白銀とうはくぎん峯かみ是こゝに其その方かたの色いろは。分わかる。瑠璃りゆりは青あお。頗脂ぜんは水晶すいしやうの梵語ぼんご。透明とうめいの義ぎに。此こゝに工くわう用じやうの山やまは。南なんは青あお。東とうは白しろ。西せいは紅こう。北ほくは蒼そう。須弥しゆぢの山やまと云いふ。欽きんあり。儒家じゆぎやの天文てんぶんの北辰ほくへんより。東方とうほう青あお。西方さいほう白しろ。南方なんぽう赤せき。北方ほくほう黑くわい。中央ちゆうじやう黃色わうじき。以もつて五行ごうぎやうに配はいを。儒家じゆぎやの天文てんぶんの北辰ほくへんより。

の違へ四つの高峯の頂絶頂のわらへ令別夜及の敬するに因との事と
金剛手とあり西南善法堂元生城各道小卒表は東北圓生樹
四の自ら天の形象柔和忍辱の相へ人間百年月夜壽一千歳を
前にも云如く北極城頭上に戴國土半年長に夜なるは發明也と
佛書に四洲の人の壽城説と前の四洲の各に各誌如く天上世界に
北洲の壽城記と是又北極城頭上に見最北の地を城知下須弥の
右方に日輪城なり輪徑五十一由旬とあり日の大なるは八百十六里
一由旬十六里 九方に月輪城なり輪徑五十由旬とあり月の徑尺八百
一里八六町 且世俗の言に周圍五十由旬と有謬之周圍は三倍の數とあり月
輪の九方に小輪城なり星の日月より高く懸城知む最小星

一俱盧舍其最大星十六由旬是衆星大小の分量城記せし俱舍
論世間品日月の迷盧の半日八五十一月八五十一あり又最小星の徑
一俱盧舍最大星の徑十六踰繕那とあり踰繕那と云は中旬と云も
唐土の十六里俱盧舍は二里に相當し二里八六町と一説に唐土の六町
とあり日本の間尺は合も是は四町三十六間餘小當或人疑十六中旬は
二百五十里是最大星の徑小星の徑二里に比し是は大小の差異へうも
甚しと然に佛經に説れ教て一定をば増一阿含經に大星は一由旬小
星は二百歩樓炭經に大星は圍七百里中星は四百八十里小星は二
十里瑜伽論に大星は十八拘盧舍中星は十拘盧舍最小星は
四拘盧舍とあり日月星の分量儒家の天文に比し是は甚しや且

の説之抑乾坤覆載の間ハ微妙不思議古来より天文數術の後傑
出て曆法は未付の行人と云ふ事ども毎々天に不齊の差出ず其
法數百家も用らる。耶。時に従て法は更ると和漢相同の法は
一析の算盤は提て星の大小は勘較せん。識者ハ笑也。又ハ書よ
諸星ハ諸天の宮宅報に依て感ぜる。福力光現むと云。又ハ云く
初利天高ハ萬由旬 唐土の六十五万二千八百里ハ當 日月去地
四萬由旬 是迷盧の半と説く。四方ハ唐土の三十二万六千四百里
幾由旬と云ハ儒の天文ハ度數は用ひ里數は用ざる如し。大數と
りて敏多々也。日月ハ七箇の海と山との總量二十二万八
千二百二十五由旬の外第八の鹹海三十二万二千由旬の海上は旋轉

南洲ハ西より出て。洲の北は經て東に没す。東洲ハ北より出て。洲の
旬餘は行也。日月行道の徑一百万由旬ハ南洲ハ日月東より出。
洲の南は經て西に没す。西洲ハ南より出。洲の西は經て北に没す。
北洲ハ西より出て。洲の北は經て東に没す。東洲ハ北より出て。洲の
東は經て南に没す。故に佛比丘に告る。南浮洲の別名ハ南瞻部の人
の西方ハ瞿耶尼の人以て東方とす。法苑珠林ハ云く。南浮洲
無東西可處有南北とも説り。儒の天文ハも天ハ昼夜なく。東
西ハ各指北極より名づくる。日轉一昼夜に旋て三万由旬ハ四千八
百里ハ一里ハ六十分の一。一時が間に四百万里は走其數甚大と疑ふ人
あり。地球九万里ハ支那ハ是也。是は人間の業に一周回せん。假令

順風に帆を揚げて、疾速に飛ぶとも。四五年に経べし況や
地に比ぶ、廣大無量の天は、行唯一日一夜に九万里の地を照し、
すくて、惑を解ぶるもの。俱舎論に日月衆星、何に依て住むや。
風に依て住し、謂諸の有情の業増上力に依て、昔に風を起て、妙
高山を繞り、空の中に旋環し、日等は運持して停び、陸に止む。
彼所主此は去て四方踰繕那なりと有風と、梵語に毘嵐と云、又
毘蘭彼女とも云、此は猛風と云、日月猛風に乘るもの。昼夜運轉
て陸に止むあり。又涅槃會疏に五風に吹るもの。自然に運轉し、
持風にて住し、三に動風、四に轉風、五に行風と云、儒の天文に九天
十天の説は、儲宗動天の運轉、烈迅一息の間断るべし、諸天是

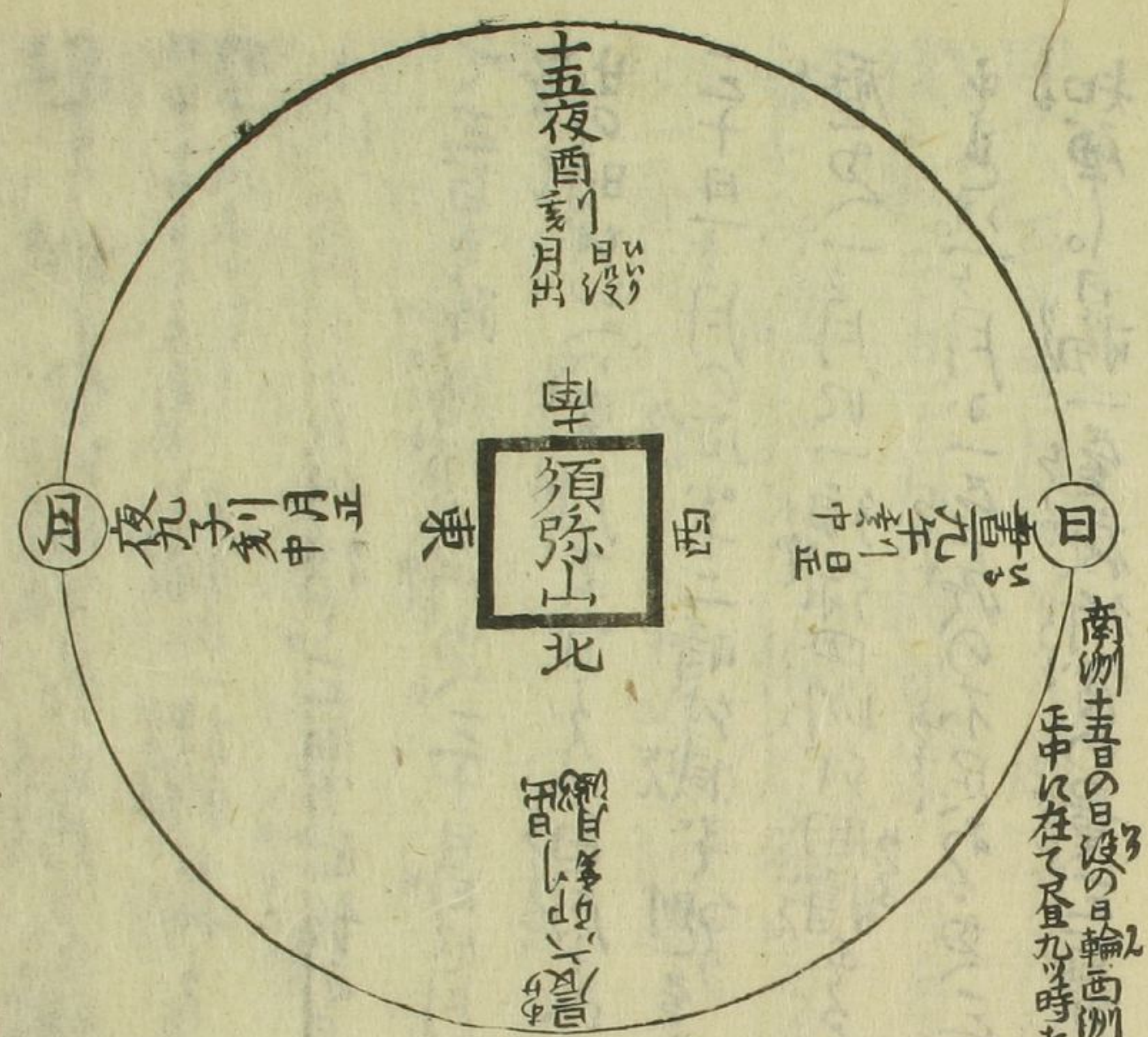
制せらるる也。日月星辰、暫も亭主と云、
一氣は旋次と云、又鉄圍山と云、その實は山は石に
有て象るべし、等、儒家の赤道環の類と知、其辺に毘嵐の餘風
ありと、佛書に出るべし、以て知る、赤道は南北二極より九十一度余つた天
を平分せし、竹助は、最初小西瓜に以て譬する、見合辨ず、又仏經に
日道一頁十有七、主復すと説り、是三百六十か、一年の日數、小稱
との、節氣西より東に向ひ、南方は夏、西方は秋、北方は冬、東方は
春、南方夜極て短時、北方夜究て長し、瑜伽論に日行時、遠
近あり、若し燕迷盧、遠に時、寒分と、近に時、熱分と、いと、又鉄
圍の邊に、毘嵐の餘風あるべし、日過ると速に、須弥の辺に、毘嵐の餘

風の如く日行し緩くとも

佛説の月宮殿行て日輪近づくは以て日輪の光は被り復照され
餘辺に影は發し自ら月輪は覆ふ此時圓満せばとんせしき
日輪より照せば西辺に影は發し故に餘辺と云日體淨妙は月の
體は稍濃くも月輪照して自ら覆ふ其覆層の形は遠く
見え山も樹の影は發する如く照し多少異なるも復も
亦多壞異なり所以に故と不定日輪は速疾に月輪は遅緩に
度同のべ日光は赫奕とて月明は時方二十一日より晦日に至る
日輪東にあり月輪西に在り十六日以後の月輪は西邊に影は發し
西方欽朔日より十五日まで日輪西にあり月輪東に在り朔日以後

月輪は東邊に影は發し西方を喻は行燈は以て炬火に對映を時
炬火の方益光は對映せざる方行燈は自ら影をせざるなり
涅槃經に佛迦葉に告ぐるは有て月の現せざるは月
没しては後の相は作らば月の性實に没するなり故に他方に現す
は彼所の衆生復月出ると謂り月月の性實に出るとは如く
如何なるも須弥の障は以ての故に現せば其月の常に生ずるは
出沒するも一なる佛の天文に天の夜ると云に如く佛は月は
一圓の積水元日光か一日の光は棄て照日月上下に在り日より
備する月の光は天の方に向ふはハ下地なるも光は日月相對する處で
漸く月光地の方に向ふは漸く天の方を究ては月は圓の後又相對する

初は小欽没日城受る月の西辺光如暎城受る月の東方光と傷ハ光理
 城受る佛ハ暗の城況佛法の比五に告あぐ若同浮洲日の心中る
 時東洲弗波提ハ日始て没一西洲瞿耶尼ハ日初て出北洲鬱單越
 瞿盧洲正に半夜に當る若瞿耶尼洲日の心中る時ハ同浮洲は
 日始て没ハ鬱單越洲日の心中る時ハ瞿耶尼洲日初て没一弗波
 提洲日始て出同浮洲まさハ夜半に當と云又毎月十五夜ハ日没セ
 月出と同トク酉刻之南洲酉刻の東洲ハ子刻北洲ハ卯刻西
 洲ハ午刻之故に南洲十五日日没の日輪ハ西洲の正中に當南洲ハ日没
 北洲ハ日出南洲十五夜月出の月輪ハ東洲の正中にあり南洲ハ日出東洲ハ夜半
 北洲ハ日出猶四洲日月出没正中に繋る圖城たいに示し



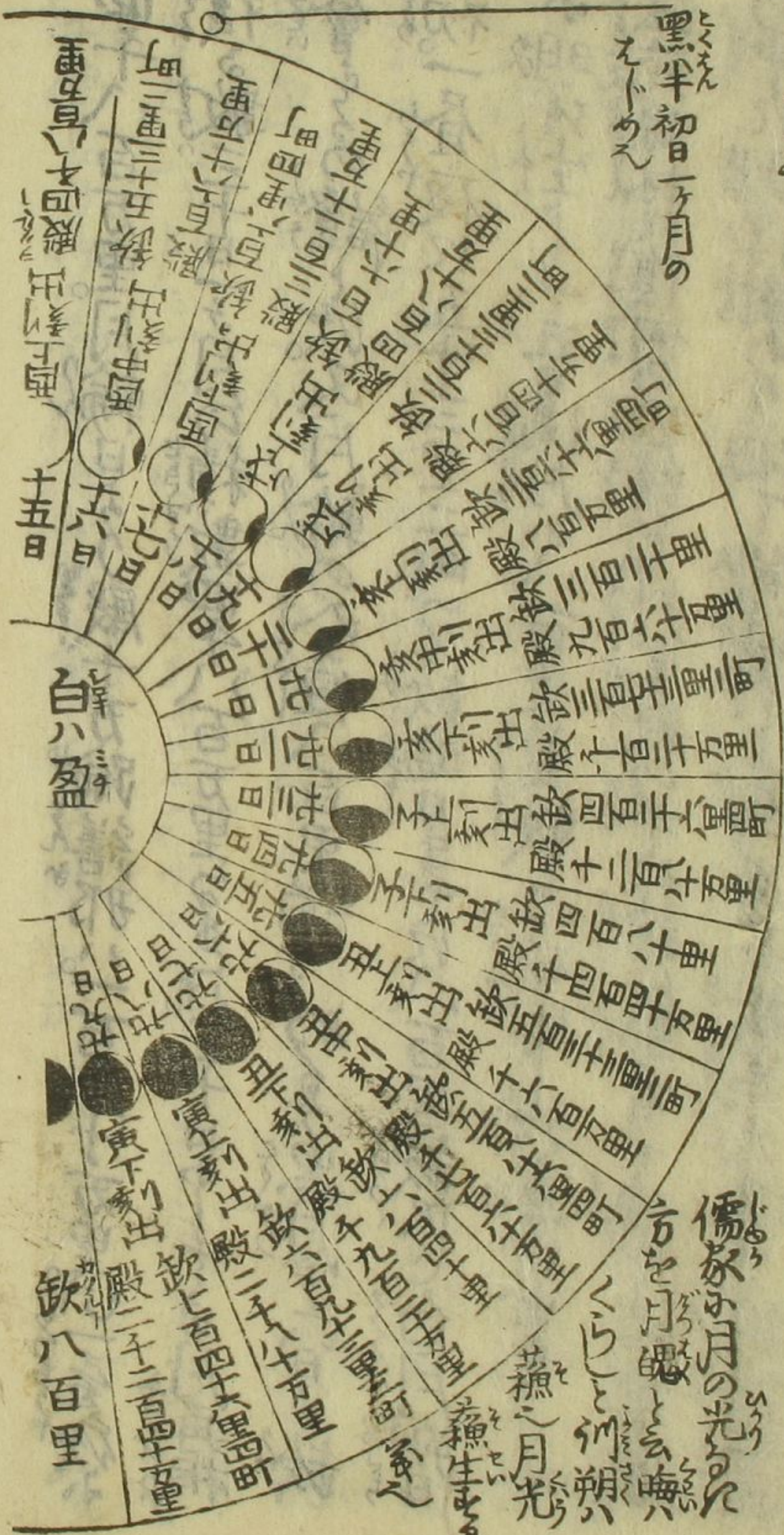
南洲十五夜の日没の日輪西洲に在り
 正中に在て夜九ツ時より

ける西洲城に接はる連日輪の
 正刻ハ何の刻ハ被洲何の刻ハ
 正地に知る傷家の天をもて地ハ
 渾多らる故に正の日出西方まさ夜
 正に西日出るは又其西ハ夜
 東方に没日生くるは乾坤の間
 時ハ曉時ハ黄昏と云り

天竺六日大支那と違ひ。十六日成りて月の一日也。十八日日月の満成終る。
是より前十日成り白半又ハ白月と云。後十五日成り黒半とも黒月と云。
日る日るは前半月輪の一旋轉日輪より遅し。一昼夜毎に十方踰繕那
と云。一月二十日成りて二百方踰繕那日輪より殿之日輪ハ一昼夜定
て二百方踰繕那成り行也。二十日日月と日と合次。又月輪東方より
出の時成りハ黒月十二日より白月十八日成りて。此より漸く遅しと云。
二十日一月の間ハ十二時成り減じ一昼夜日輪ハ一昼夜定て十二支成
歴也。一月ハ一須弥四洲成り圓也。此より必三十度之月行成りて對
してハ一月ハ一昼夜の不足ある也。二十日ハ二十九度と云。小の月成り
知也。日輪一昼夜行度の量二百方踰繕那成り。漢古の行程也と云。

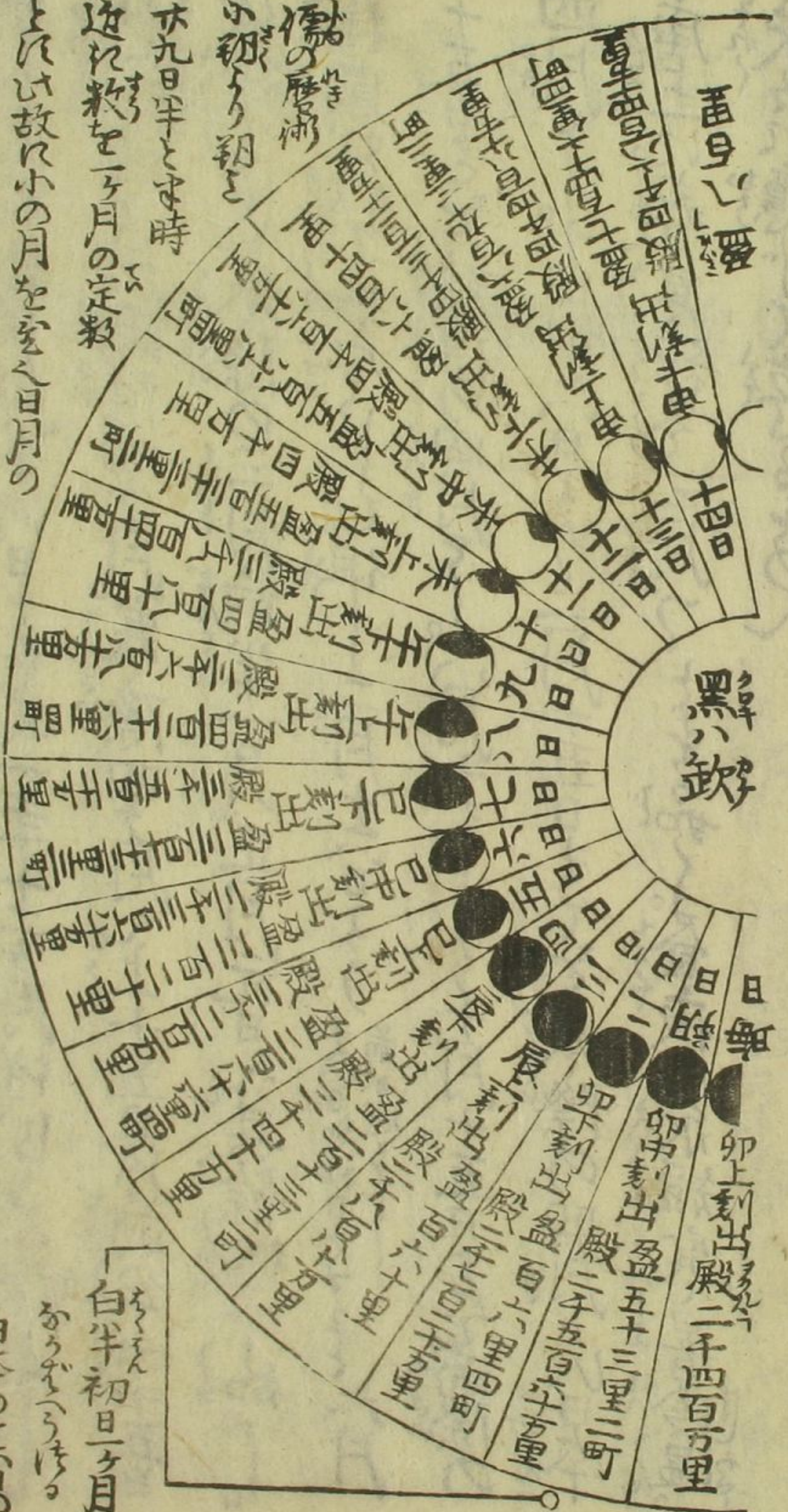
四千八百万里。月輪日より殿十方踰繕那ハ二百六十万里。一昼夜ハ
後數三百一月の積數四千八百万里と云。二十日成りて日月再相
會するの證也。又月輪の全徑ハ百里前也。此より黒月十八日成り
初一昼夜に五十三里二町づ。故晦日成りてハ百里成り。白月朔日
ハ明成り生じ。十五日満月ハ八百里盈數也。亦同也。此より晝夜出也。
法苑珠林に復何の因縁也。月宮殿の中に諸の影有て現也。此大洲
の中に閻浮樹あり。依て閻浮洲と名づ。其樹高大也。影月中に
現也。又月中桂の樹有と云。似たり。又別書に過去に免有て菩薩
の行を行也。天帝是成試ん爲肉成索て食んと云。身ハ火中に捨
身命の惜も云。後示也。天帝怒て焦る。免成取月の中に置也。

未来一切の衆生は。目下舉是城。瞻是過去の菩薩慈城。行
 身。知。荒唐信。足。玉兔の。見
 身。知。荒唐信。足。玉兔の。見
 身。知。荒唐信。足。玉兔の。見



黒半初日
 一ヶ月の
 一ヶ月の

儒家の月の光
 名を月殿と云
 しくと月殿



儒家の月の光
 名を月殿と云
 しくと月殿

前も云如く。天竺二月の十六日。其月の始と取。十五満月過欽初。初日。其日酉中。其月の出。月の初。欽數八五十三里二町。月の日。初。

白半初日
 日本のはじめ

二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十月	十月	十月	十月	十月	十月	十月
後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半

寒際

雨際

熱際

上の列せし日本唐土の月海之天竺何際哉
 月後半幾日と称す。二月九日未の宿。公涅槃
 二月十五日支那の初也。天竺其寒際四月目の
 前半後の日之誕生熱際二月目前半八日
 雨際二月目前半九日比。夜漸長く至る。
 是八月九日といふ方秋分也。天竺熱也。二月
 十月十日と毎日大雨多依て雨際といふ方
 夕之雨の如し。寒際は月目前半九日比。夜や
 減り至る。是二月九日といふ方の春分也。

數ハ百六十方里と記。夫より毎日の數ヲ知。一日附城の中に識ハ日本
 唐土の日記ありて。程は知易しむ。天竺二月朔日晦日廿日かどを
 一。黒半幾日白半何日と云。又一年十二月廿八日分て二際と云。一
 熱際四月月雨際四月月寒際四月月。上十五日迄前半。下十五日
 後後半也。實際の三月前半一日。正月元日也。其餘僅だ知下。
 猶圖成りて知安しむ。但二月十六日より十一月十五日とを。雨際
 十五日とを。熱際の四月。六月十日より十月十五日とを。雨際
 四月。十一月十六日より二月十五日までを。實際の四月といふ日本
 唐土に春復秋冬三月づと云る如く。昼夜の永短寒暑冷温
 夫々に應じて立るとの云

佛説に依て日月の蝕は速く。涅槃後ハ羅睺阿修羅王の手は
以て日月は速く是は衆生蝕と謂り。日月の體實に欽下と法華
の註に羅睺と六障持て日月は障持とるもの。是畜生の種から身
長八万四千由旬とあり。夫日月の交蝕曆家ハ推歩とまじり一定の
數有て既往未然數百歳も坐致べしもの。手は以て障持ハ
兒輩も肯べく。然印度の俗古より日月の蝕はまじり傳習
來るる舊はまじり。世の知識俗の傳はれ道に入らむることを
こち如來の説法ハ必ずと親尊數は觀理ハ盡知て此説はまじり
あはれ。既に孔子春秋ハ日蝕は書とる。二十六古史の記も所願
天變として人君は敬言の。是亦數は推理を究て筆のあはれ

此は以て彼を知下とまじり。又麟經の日食は後世より推歩とる
合さるるの間ある。好事議論はまじり。或人以為此經に限て經
傳秦火の災あり。且亂世は經て傳來ると千歳版木の磨滅書
卷の土蝕とあり。五の字ハ欽て三とる。三の字ハ二も成也。然は傳
写來んまじり。誤るるかと反覆して其魚魯ハ推考魯史
の舊文ハ知む。聖人の手筆聊誤らばは發明。夫子の仰愈
高は歎息せん。因に誌て同好に知らむと云

須彌山圖解 終

小引

宗也

須彌山圖解稿成有客曰。凡學天文曆術者。棄支那之法數何
更有道乎。子固崇璿曆者。而今演說浮圖之妄誕。竊所不冀也。
對云。此舉意有償書肆之需。而非急信之者。然子固守一隅以
爲震旦外無道。所謂膠柱者也。雖鳥雀不知鸞鳳之量。然請試
論之。若夫伏羲之仰俯。軒岐之談天。虞舜之璿璣。呂氏之中星。
邈乎遐焉。漢末乾象曆以降。名家數百。各當時之秀。而授時特
冠千古者。蓋有萬法古蹟今靈之故。然也。後世西洋學者利西
泰龍華民等。入明明竟用彼法數。頒曆於天下。由斯觀此。支那
之外。非更无道也。明焉。釋氏之教。以勸善懲惡爲專。若令叙如
刻意於此。果有出西泰華民之右者也。客唯唯。莞爾去。直誌以
爲後序云。文化己巳夏至日高伴寬思明撰并書

蘭

大藏

兒讀古狀揃釋

古状揃字の並所と誤れる保
食事戒 小本貳冊

野馬臺詩國字抄

詩の漫々、并句毎子和解
食事、野馬、人同の平生有る事、保
洪公、安陪仲會の語を述
ち、子孫を指し、子孫を指し、
子孫を指し、子孫を指し、

錦字詩國字抄

支那の婦人の生活
天子の生活を述べる、
天子の生活を述べる、
天子の生活を述べる、

須彌山圖解

併友の天文と儒家の天文と
を述べる、天文の時間を述
べる、天文の時間を述
べる、天文の時間を述
べる、

音訓國字格

二冊、いろはのまじり、漢音
音唐、農家用文章、此書、
農家用文章、此書、農家用
文章、此書、農家用文章、
此書、農家用文章、此書、

訂正 歌字盡大全

新刻、同調寶記、前編、
後編、三編、民家法、
歌字盡大全、同調寶記、
同調寶記、同調寶記、
同調寶記、同調寶記、

年中時候童蒙辨

五日七刻、辨つに、
消息往來、往來物文章、
物文章、往來物文章、
往來物文章、往來物文章、
往來物文章、往來物文章、

九字護身法傳書

九字の秘法を切紙に
書、法印行智速、書林、
江戸東嶽山下五條天神前、
花屋久次郎

